

# 明秋、京で「世界の頭脳」会議

## ノーベル賞学者ら40人

### 湯川中間子論30年を記念して

ノーベル物理学賞に輝く湯川秀樹博士（京大基礎物理学研究所長）の中間子論が初めて発表されて明年は満三十年になるが、湯川中間子論三十周年を記念して「素粒子の研究の長進と通じについて」と題する国際会議が、世界の頭脳を集めて明年九月、京都で開催される。



湯川博士



ハイゼンベルグ教授



パウエル教授



マルシャック教授

湯川博士が中間子の存在を理論的に予想したのは一九三五年。その素粒子論が驚かされるまで、大きな議論が日本で開かれることになって、日本学術会議と京大基礎物理学の後、各国の学者によってその存在が実証されてきた。たまたま、来

年が高エネルギー物理学の国際会議が日本で開催されることになって、日本学術会議と京大基礎物理学の共同で開かれることになったもの。招待される学者は、中間子論の発展について理論、実験の両面から貢献のあった人となっており、西独マックス・プランク研究所のW・ハイゼンベルグ教授、英アリスターのG・P・パウエル教授、仏アカデミー会員のD・プロイ博士、デンマークのL・ローゼンフェルト教授、米のR・E・マルシャック教授、G・チニウ教授ら、ノーベル賞学者を含む世界のトップクラス二十人を予定。国内からは湯川博士をはじめ、朝本武一郎

坂田昌一、小林敏、武谷三男、谷川善孝ら第一級学者十数人の顔ぶれがあがっており来月上旬の組織委員会最終的な選考を終える。会議は一週間の予定で、期間中の一日を三十周年の祝賀会や記念講演会（一般公開）を開く計画もあり、予算は約一千万円。参加者を世界的にすくえた字に仕上げたため、規模は四十人前後と小さいが、この面の学会では昭和十八年秋に京都で開催された「国際理論物理学会議」につぐ賞

紀はじめてもたれた「ソルベ会議」は物理学の進歩に大きな貢献をしたが、この会議も「ソルベ」に劣らぬ役割りを果たしたい」とその成果を期待している。

#### 哲学的背景から追究したい

湯川博士の話、わたしが中間子論を発表して以来、多くの素粒子論が見つかって、長い目で見て、現在の学者の態度はもう目先たけにとらわれていなくな気がす

る。素粒子のさらに奥にあるものは何か？物質の根元、自然界の法則といった基本的な問題を哲学的な背景から深く追究しようというのが、こんどの会議の趣旨だといえる。そうした根本の問題について話し合うには、小人数で、落ち着いた雰囲気ではなければならない。ソルベ会議にはアインシュタイン、プランクら少数の学者がそれぞれのお考えを持ち寄って大きな成果をあげたが、わたしたちはこんどの会議をソルベに劣らぬ会議に願っている。

c073-001-011